東亞同文書院中國調查手稿叢刊

24

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

東亞同文書院中國調查手稿叢刊

24

國家圖書館 編

國家圖書館出版社

第二四册目録

昭和四年(一九二九)旅行日誌(第二十六期生)

小幡廣士　第六十五卷……一
土田増夫　第六十六卷……五七
山名正孝　第六十七卷……一三七
宮澤敞七　第六十八卷……一八三
山下長次郎　第六十九卷……二四九
小山田繁　第七十卷……三九九
松井幸人　第七十一卷……四四三
小田健三郎　第七十二卷……四八一
久保寳次　第七十三卷……五四九
宇田政雄　第七十四卷……六〇七

昭和四年度

南支港勢調査班

調査日誌

第二十六期生

小幡廣士

東亞同文書院調査報告用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第六十五卷　調査旅行日誌

支那の時局は、私の四年間に眼に映ぜし処ではさながら猫の目である。絶へず、これからそれへ、それから又、先の方へと移る。くるくると動いて止まるところのない猫の目だ。何かいい獲物があったら、それへ向って猛然と飛びつく。「賭てば百発、百中少ば賊」の諺が、悲しい、日本の戦国時代に見るやうな厳格さでは行はれてゐない。たとへ、それが命にかゝはることであらうとも、完全に「金」で片がつく。「金」は由来金銭万能である。併しながら、支那では、それは完全に、そして如実に見られる。要するに、国民性だ。あまりにも徹底した「金銭万能」の項目だ。

書院勉強生活の四年間は、四年間の調査旅行で、一と先づ、型がつく。そこで、この旅行が重大なる意義

を持つ。先人の跡を、残された文献に見るとき、何時も、そのためには身命を賭してでも進まんとする、旧くましい献身的努力を見る。

私達は今やその時に立った。重大な意義と歴史を持つ旗手へと立たねばならぬ。私はそのために、全力をつくさう。

併し私の目の前には時局の難局が横はった。

猫の目のやうに変化する時局も、今や薩長一派つ、その背後に持つ財閥の金力の故に、平静なるかの如く見へつゝあった。薩長石を代表に持つ支配新興資産階級は、今やその覇権を確立せしかの如く見へつゝあった。それらの一階級（国民党）によって代表される）の表はす事天白日旗は確成あるものとして

支那全土へ掲げられた。

然し乍ら、国民政府の包蔵する本質的矛盾は遂に、私達の眼の前に於て、爆発した。北方に於ける馮玉祥、広西に於ける李宗仁、白崇禧は、果然反旗の旗幟を鮮かにした。殊に広西派は、その根據たる広西を離れて今や、湖南から広東へ迫った。出発直前の新聞紙は広東の陥落をさへ伝へた。

広東並に広西省の、私達の計画した諸々の通路は完全に遮断された。私は豫定の湘桂鉄路を放棄せねばならなくなった。残された唯一の線は南海岸線に沿って南下し、出来得べくんば、新寧鉄路を廻ることであった。併し、新寧線もまた南に開する呉隊長達のため不可能となった。こゝで私達の班は南支経済調査班となり、

本演劇は広東駐在邦人慰安のため行なった。

次に記すところは私達の辿った跡である。

尚至る所に調査上特に便宜を賜った方

広東台湾銀行　紀野氏

〃　門田氏

〃東　澁谷副氏

広東総領事館　杉本氏

香港弁物館　細川氏

汕頭領事館　戸根木氏

廈門領事館　領事並に館員の方々

香港領事館　副領事並に館員の方々

香港山下洸氏　草野氏

に感謝致します。

東亞同文書院圖書之印

廿二十九日　晴天

待ちに待つた門出の日は来た。自働車の都合で九時出門。自働車は新緑のアカシヤの並樹道を走る。朝霧を衝いて。旅だ、旅だ。心のときめきにほてつた顔を冬の涼風が心地よく撫れる。

先づ呉淞路に出掛けて色々わさを買物を揃へ、携帯の紙幣をすべて銀貨に換へる。これがとても重たい上に絶へず注意してゐなければならぬので大分閉口した。

税関碼頭に着くと多数の見送人が見送りに来て居れこゐた。ランチが岸を離れると、突然嵐吹け吹けの歌が勇ましく起る。何とも知れない気持が起る。泪ぐましい心持だ。

船は日清汽船の蓬山丸だ。船長の好意で同船の三等

東亞同文書院調査報告用紙

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

共に一等室に入れて貰って大いに有難かった。船が上海を離れると、日清汽船にある先輩より教いた紹介状を携って班長と二人で船長を訪問挨拶する。マドロス特有の豪快な人だ。

何もすることはなし、船の一等にもなんか乗るのも面白で最低かもしれぬほど見送りを叩きなかり寝台の上に長々と横になってみると、同郷の先輩で、上海に戻ると間もなくなった人が突然顔を出して、大いに奇遇を喜んだ。日清汽船の宴へ呼ばれて麦酒の御馳走になりなかり色々昔の思出話に耽った。つぎに安線電信局長さんと同班員松尾加同氏であるとわかって、大いに愉快になった。船中で船中でないやうな生活を書流るで強行した訪である。

五月二十日　晴天

今まで、打續いた忙しさの疲が一時に出た樣で日となく夜となく眠りつづけてゐる。只何も考へないで、考へることから怠くうたゐる。讀むために引張り出した本も讀まないで、兎角眠つてゐればいゝと云ふ樣好である。眠を覺まして窓から外を眺めても、只一帶の青海原で、あくまで單調な眺めである。

朝から蓄音機の音がしてゐる。眠を覺ました耳にはその中ばくしい音調がまとわるく間の中へ入つて來るようである。蓄もあれば廣告もある。花札もあればトランプもある。

淋く午に近ずいて、食後の散歩をする。デッキパッセンヂャーとの境の鎖重なのには驚いた。大い鉄棒で境され、海へも出た人も出の鎖くとかうた柵がついてゐる。

東亞同文書院調査報告用紙

おまけにピストルを持った女婦人が印度人が絶えず警戒の目をはなさない。先年デワキパンセンチャー襲に混って来た婦人に襲はれた者であるそうな。がそれにしても如何に区別の甚しきことよだ。

それからブリッヂへ上って行って望遠鏡を覗かして貰ったり、船の取り方を教へて貰ったりした。こゝは私達の想像以外の種子船長の異りだ。自然異の風俗では種子船たりしとも。

五月二十日　金曜　晴天

一日中ぶっ続けに眠ったので今夜は早く寝ました。

早速洗濯して私の夫を月潔にして敬礼する。

天気晴朗、波穏かである。相変らず一平々凡々の美気だ。

相も変らず、サローンからは蓄音機が響いてゐる。今晩
は中の出張の歌とかいふ奴だ。
早お帰りさんからいろ〳〵と伺話を承る。そして十時に
日吉のい、船長宅の横のライラックトの側で一杯に字屋に
入って戴いた。スドロパイプがとてもい、様好だった。
庭は例の商長さんを訪ねる。色々話をしたり、ラッパを
聞かせて貰ったりした。途中で盛山丸とすれ違った。船長さん
から帰り掛によろしくとのことで、一同はるかに敬意を表す。
夫人で見ると、出発家とても忙しくて、コレラも種痘も全
の記録書を貰って来るのを忘れたので、盛山丸に通信して
早速書渡迄って戴くやうにしようかといふ話が出たが、蓄
渡も元氣も大丈夫との話なので止めにした。記録書がなか
ったら注射と種痘を又して貰へばいゝ丈の話だ。後で考へて

みて、そんな事数はいうなかったのは幸だった。

六月一日　土曜　晴天

ふと目を覚ましてみると、丸窓のかなたに緑麗な島を見る。厦門に着いたのだ。朝食は了て六時だ。早速起き上って甲板に出る。右に厦門島、左に鼓浪嶼と眺めつゝ船は静かに碇泊する。両島の距離は狭く実に美しい。色彩と調をつけた船板が清新なる。両島間の交通は全くとゝつていい程この船板によって占められている。八時半に上陸。通訳士王坂氏の案内にて先づ領事館へ行く。海上から見た鼓浪嶼は外国で、その内部たる市街はあまりも近代化されていない。道は凸凹で汚ない。

領事館は丁度引越で忙しい。先輩福田氏に仏蘭西の調査

の概略をお話しして置いて、三坂氏の伝来由にて鼓浪嶼を巡る。先づ坂を下つて一領事館は丁字路の山腹位にある一西洋岸へ出る。鼓浪嶼は東と西と全く趣を異にする。西側はすべて住宅地で、列る処に、美麗な洋館と、それを囲む亜熱帯的植物とが見受けられて、今まで日に見馴れた墨色と違つた別天地の観がある。

日光巖に登る。　日光巖は島の最頂上をなしてゐる、巨大な岩石。岩と岩との間が廟になつてゐる。岩とゝ云ふ岩ことごとくが文字の刻みで一杯だ。流石は文字の国支那丈あるわいと思へば感心する。巖上は鉄梯によつて登られる。巖上よりの眺望は絶佳だ。厦門及コロンスは目下に、その優美な景気を展開さす。

元々、台湾人は厦門及奥地出身者の子孫にして、既に

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com